

## 大川の家

正会員 竹原義二君

九州佐賀県、筑後川を臨み、その水運の利を得て発達した家具・建具・製材の町大川市小保。その木材の町にある製材所の資材置き場に、二代目の家族のためのこの住宅は立地している。まるでモデルハウス場のように平らなアスファルトの広場に突然出現するこの住宅は、あえて地面から縁を切るように、西側に位置する筑後川の堤防の高さまで1.5m浮かせられたコンクリートスラブの基壇の上に建てられており、室内から西側に広がる筑後川への眺望を確保するとともに、外部の資材置き場から室内への視線を制御している。

11m四方の平面の四隅に独立した部屋を配置し、それらを玄関・吹き抜けの食事室・階段・通路で繋いだ平面形。中央を開け放った一枚の屋根がかけられ、それぞれの空間どうしの独立と連携の関係が計画されている。

それらの室と室の間には室内側深く入り込んだ外部空間が絶妙に組み込まれており、そのスペースが内外の空間を有機的に繋ぎ、環境を制御し、光と風をやわらかく室内に取り込む“間”の空間となっている。この“間”の空間はいわば我が国の伝統的な町屋に見られる縁側や坪庭という環境制御スペースの発展形であり、あるいは内部に深く入り込んでいることからいうと、朝鮮半島の民家に見られる“マル”の展開とも位置付けることができる。

室と室、室とマルの間は引き戸を中心とする多様な建具で仕切られており、季節と使用状況によって開閉が効果的に行われる。外側の木格子扉を閉めると光が優しく入り込み、海風がやわらげられ、テラスは外部から内部に変化し、外部からの視線を気にせず豊かで開放的な生活が可能となる。

その魅力的な空間の表面を構成するのが80種類を超える無垢の木材。製材倉庫に眠っていたという広葉樹を主体とする端物の木材をあえて鉋をかけず無塗装で使用し、荒々しい表面を残し、元の寸法のまま、それぞれの場所に応じてディテールを選んで再生させた壁や床は、この上なく力強く、また暖かな木材の素材感と大工の驚くような手仕事の跡を伝えながら、訪れた人々を包み込み健康にしてくれるようだ。

これだけ濃色を含む多色多種類の木材を使用しながらも、暑苦しさをまったく感じさせないのは、四方から適度に入り込む風と光による透かしの効果と、長年木材と対峙し続け積み重ねられた設計者の目利き力、隅々まで配慮されたディテールの工夫の積み重ねの結果であろう。

この製材の町に、木の魅力を伝える新しい木材の使い方を提案し、木の新しい可能性を実現した意義は大きく、その空間は力あふれ、豊かで住宅の計画上も興味ある提案が行われている。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。